

小説

うじ はら たい さく
氏原 大作

山口市
(1905～1956)



【著作】

『幼き者の旗』（昭和14・主婦之友社）
『父なきあと』（昭和15・大日本雄弁講談社）
『氏原大作全集』全4巻
（山口県教育会 昭和51・条例出版）ほか

終生、ふるさとにあつて文筆活動をした氏原大作は、まさに野の作家といつてよい。決して豊かではない農家、しかも“父なし子”という陰口までたたかれながらも、少年時代は常に村童の中にあつて明るく、ひるまず、たくましく育ち、だれからも愛された。小学校高等科卒というハンディにもめげず、十七歳という若さで小学校の代用教員になる。大正十年代の阿武郡下の教育界は革新的教職員があつまつていて、機関誌『更新』を発行していた。大作は、それら先達の影響を受けながら、子弟を教育した。

昭和十一年（一九三六）、たまたま『少年倶楽部』に投稿した作品「見たか青空」が、編集長の目にとまり同誌三月号に掲載された。炭焼きの息子の立身出世物語である。大作の文学の世界にある一つのタイプだが、これを機会に常連作家となる。

氏原大作の名を一躍決定的にしたのは、勿論、主婦の友社が募集した懸賞小説に一等当選した「幼き者の旗」の名声である。これはトヨコ夫人が戦地に送った手紙がモチーフとなったものである。登場人物はすべて家族。大作の作品の大半は、私小説とは違った家族小説といつてもよい。

大作を兵隊作家として名付けるのは、酷であり認識不足である。作家として教育者として彼の思想の基調をなすものは隣人愛である。貧苦の中に家族を支え、何人もの家庭不遇児の面倒をみている事実を見逃してはなるまい。

大作のよき友であつた評論家の岡不可止は「彼は文学で口に糊することの至難さを、しかも山深い地方にあつて克服することに全く精魂をつかい果たした」と述べている。

氏原大作が若し生きていれば、いまの山河・人心の変貌をどう嘆くことであらう。

（文・和田 健）



長門峡（山口市阿東）に建つ文学碑



結婚当初の家・直筆詩

おとうさま万歳

修一郎君は八つで大作ちゃんは五つでありました。妹の登志子ちゃんも、まだおかあさまのおなかの中におりました。

修一郎ちゃんも大作ちゃんも、かしこい子供でありました。だから、おとうさまからも、おかあさまからも、とてもかわいがられておりました。

それは、支那事変がはじまつて間もない、八月十五日の夜のことでありました。修一郎ちゃんも大作ちゃんも、おとうさまやおかあさまといっしょに、ぐっすりやすんでおりました。

「もしもし、もしもし」

暗い家のそとに誰か呼ぶ声に、おかあさまが目をときました。

「はい、どなた？」

と、返事をなさいました。すると、
「原先生は、いらつしやいますか。役場からまいりました。」

「えっ？ 役場から……」

おかあさまはびっくりして起きあがり、
「あなた、あなた、役場から見えました」

「そう言いながら、いそいそおとうさまをゆり起こさしました。」

戸を開けると、提灯の灯が見えて、

「先生、召集令状がまいりました」

「そう言つて、役場の人は赤い令状を渡して、
「おめでとうございます。お国のためにご苦労でございます」

と、あいさつして、帰って行きました。「いよいよまいりましたね。おめでとうございます」
おかあさまは、にっこり笑つていわれました。おとうさまは、目をしてしばらく考えてから、
「子供を起こしなさい。ねむたいだらうが、よく子供にも話しておいてやりたい」といふので、
「はい、どなた？」



（『幼き者の旗』冒頭より）

氏原大作 年譜

（提供・和田 健）

明治38（一九〇五）年

六歳

明治44（一九一）年

一〇歳

大正4（一九一五）年

一〇歳

大正6（一九一七）年

一二歳

大正8（一九一九）年

一四歳

大正9（一九二〇）年

一五歳

大正10（一九二一）年

一六歳

大正11（一九二二）年

一七歳

大正15（一九二六）年

二一歳

昭和2（一九二七）年

二二歳

昭和3（一九二八）年

二三歳

昭和5（一九三〇）年

二五歳

昭和7（一九三二）年

二七歳

昭和8（一九三三）年

二八歳

昭和10（一九三五）年

三〇歳

昭和11（一九三六）年

三一歳

昭和12（一九三七）年

三二歳

昭和13（一九三八）年

三三歳

昭和14（一九三九）年

三四歳

昭和16（一九四一）年

三六歳

昭和17（一九四二）年

三七歳

昭和20（一九四五）年

四〇歳

昭和24（一九四九）年

四四歳

昭和26（一九五〇）年

四六歳

昭和29（一九五四）年

四九歳

昭和31（一九五六）年

五一歳

3月20日、山口県阿武郡篠生村（現・山口市阿東）篠目に生まれる。本名阜（とおる）。家は農業。母シゲ。父と呼ぶべき青年は日露戦争に従軍し消息不明であつたため、戸籍は祖父亀松、祖母ツルの四男として届けられる。

12月23日、国鉄山口線、仁保木戸山隧道工事中、土砂崩壊し工夫五十余名生き埋めになる大惨事発生。少年阜は、よくこの工事を見物に出かけた。これが後年、少年小説『花の木鉄道』などのモチーフとなる。

篠目小学校を卒業し、4月、篠目尋常高等小学校高等科に進学。『日本少年』『少年倶楽部』を愛読。

3月21日、小学校高等科を卒業。篠目駅前にあつた篠目信用組合に売り子として勤める。

11月、寺山月亭・吉田翠泡らと詩歌誌『もずのす』を発行。

防長新聞歌壇に原暁星のペンネームで盛んに短歌を投稿。10月、詩歌誌『小さき芽』を発行。

7月、地福村立地福小学校に校長山縣良正の勧めで代用教員として勤める。『小さき芽』10号で廃刊。

1月10日、歩兵山口第四十二連隊に現役入隊。

現役満期除隊。

徳佐村立徳佐小学校に代用教員として勤務。校長三戸雅乙。曹洞宗広福寺に下宿。

徳佐村下宇津根、福田兼松の二女トヨコと結婚。

4月、長男修一郎生まれる。

村内の同好の士と「しがらみ短歌会」を結成、研究指導を始める。

4月、二男大岬生まれる。

『少年倶楽部』三月号に短編「見たか青空」掲載。以後、『少年倶楽部』の常連作家として活躍。

8月、日華事変で召集を受け、華北戦線に従軍。8月、長女登志子生まれる。

6月、現地から応募した主婦の友社の懸賞小説「幼き者の旗」が一等当選。選者は菊池寛・久米正雄・小島政二郎。一躍新進作家として脚光を浴びる。

『幼き者の旗』出版。天中軒雲月の浪曲レコード（四枚組）発売。俳優沢村貞子主演で、東宝映画になる。

1月、長編小説「父なきあと」、松竹で映画化、笠智衆・川崎弘子ら出演。

三男洋平生まれる。

8月15日、敗戦。失意の中にあつても執筆。『防長新聞』に「蒼生の暦」連載。

10月20日、妻トヨコ死去。

2月、中原月子と結婚。雑誌『母の光』3月号から、前妻トヨコを主人公とした「女の碑」を連載。

長編少年小説『花の木鉄道』、講談社から出版。

発病。自ら戒名を「野風道氏原大作居士」とつけ、死を待つ。12月31日、永眠。病名、肺結核と胃がん。